

このところ、上質なラブロマンス系の作品を立て続けに見ることができ非常に喜んでいるのですが、その中の一本は、塚原あゆ子『ファーストキス 1ST KISS』です。塚原あゆ子は昨年『ラストマイル』『映画グランドメゾン★パリ』と続き本作を発表するという実に多忙な人であり、その経歴を見ると現在TBSスパークルのエンタテインメント本部ドラマ映画部のエグゼクティブクリエイター職にあるとされています。

1997年入社とあるので、当時はまだに木下プロダクションと呼ばれていた頃です。1964年に木下恵介監督が、木下恵介プロダクションを設立し、その活動を映画からテレビ番組の制作に軸足を移した時期がありましたが、その後1974年に名称が木下プロダクションに変わり事業を継承したものです。この変遷の中で塚原あゆ子は10年間の助監督を経験しているのですね。テレビでの演出デヴィウは2005年、映画では2018年に監督デヴィウと順調にキャリアを積み上げ、2024年の『ラストマイル』で高い評価を受けています。ということは、間接的ながらも、木下恵介の映像美と多彩なジャンルの作品を撮りながらも一貫した人間解放と不条理に対する怒りを表す作風が受け継がれているのかと思いきや、巷で好評だった『ラストマイル』は筆者には残念ながら、何も響いて来ず、極めて人工的な人間関係とショッキングな爆破事件とを描いた凡作としか映っていません。

という訳で、危惧をもって本作を見たのですが、まず、この作品には欠点を感じられません。決して万人向けという言葉を使いたくはないものの、誰にでも受け容れられる愛の物語です。タイムスリップは2024年からの重要なキーワードになったのか、本作でのタイムスリップは実に都合の良いものですが、その巧さには驚かされます。これは脚本の完成度の高さに由来するものであり、勿論塚原あゆ子の実に丁寧な演出に拠るところも大きいのです。これは坂元裕二と塚原の勝利と言えます。運命論云々と言うよりは、人間の日常生活の中に潜む危険な要素がここでは描き出され、どうすれば良かったのか考え直すこと、しかしそう考えている時点ですでにとき遅しというジレンマの中で生きると言うこと、だからどうすべきだったのかを俯瞰しているように思えるのです。人間の営みの中での一つ一つの小さな行為の他者へ及ぼす意外な波紋の大きさを考えさせられます。

この作品のトーンとタッチといった場合、カメラの篠宮秀俊（1978~）美術の杉本亮（1976~）も大きな貢献を果たしています。特に杉本亮は、ソフィア・ Coppola の『ロスト・イン・トランスレーション』（2003）、そしてあのアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥの『BABEL』（2007）の美術にも関わるという国際的な経験を持つ有能な美術監督であることを記しておきます。

セリーン・ソン（1989~）の監督デヴィウ作品『パスト ライブス』（2023）もまた、ラブロマンス（ロマンティック・ドラマと言うべきか）作品として上質な出来栄を示しました。セリーン・ソンは韓国で生まれ、映画作家の父とイラストレーターでグラフィック・デザイナーの母を持ち、12歳の時にカナダのマーカムに移住しています。ということは、『パスト ライブス』はソン自身の実体験を描いた作品でもあります。

彼女のウエスタン・ネームであるセリーン（SELINE）は、ジャック・リヴェット作品『セリーヌとジュリーは船で行く』（1974）の「セリーヌ」に由来しているとのこと。劇中では、レオノーラからノラになっていましたが。主要な登場人物は三人、グレッタ・リー（1983~）ユ・テオ（1981~）ジョン・マガロ（1983~）が素

晴らしく良いのです。グレッタ・リーはL.A. 生まれ、カメラのシャビエル・キーシュナー（1987~）も含め、1980年代生まれの若い世代の制作した本作には、まるで長い人生経験を持ったかのような俯瞰的視線で物事を見つめる行為が自然に表現されます。NYで背後にメリーゴーランドを配置した状態でグレッタ・リーとユ・テオを撮った長回し、ラストでタクシー乗り場に向かうまでの同じく二人の移動撮影での長回しは実に効果的であり、それに続くグレッタ・リーとジョン・マガロとの抱擁のシーンは秀逸と言うほかありません。

セリーン・ソンは2014年にコロンビア大学で戯曲を中心とした制作活動で修士号を獲得したという人物であり、何作かの戯曲で賞を得たという経験を持った上で映画制作に関与し、いきなりこの作品でアカデミー賞最優秀作品賞とオリジナル脚本賞にノミネートされました。この二つの賞に同時にノミネートされた初のアジア人女性であると記されています。筆者は、偶々ではあるのですが、『ファーストキス』と『パスト ライブス』を続けて見るということになったのですが、塚原作品には欠点がないと評しましたが、本作についてもまったく無駄のない作品であり、二人そして三人の心情が沁みるように伝わり、一種のやるせなさと言うべき感情を引き起こすものでした。筆者の感じた、このやるせなさや痺れる感覚はフランソワ・トリュフォの『隣の女』（1981）を封切りで見て以来仲々感じる事ができなものでした。

そして、アメリカという、しかも芸術的創作活動という環境の中で、一人のアジア系の女性が明確な戯曲なり映画作品なりの形でキャリアを残し、淘汰を逃れ生き抜いていくことの力強さと計り知れない努力を行いながら、どうしても払いきれない内面的な弱さがあることを自覚しつつ生きていく姿を見事に描ききりました。

また、セリーン・ソンの出現を見る前には、やはり同じアジア系女性監督として挙げたいのは、クロエ・ジャオ（1982~）です。北京生まれの彼女は、国営大企業の役員クラスの父を持ち、特権階級にあったと推察されますが、両親の離婚と父親の再婚（女優宗丹丹との再婚）で反抗的な態度が目立ったようで、15歳のときにロンドンの寄宿舎学校へ送られます。それからL.A. に移り、最終的にNYで映画制作を学んでいます。アメリカ国内の先住民を扱った作品を監督したのが出発点であり、そして同じ傾向の『ライダー』で高く評価されます。独立プロ系で制作された同作はソニー・ピクチャーズ・クラシックスで一般公開されました。これは間違いなく秀作です。なんの銜いもなくごく自然に非職業俳優を起用した現代のウエスタン作品と言えます。その後、現代社会の孤独と人生というどこがゴールだか分からない道程を、暖かくも冷静な視線で描いた、フランシス・マクドーマンドが特別光り輝いた『ノマドランド』（2021）でオスカーを獲得したことはよく知られていることですが、『エターナルズ』（2021）は残念な期待外れの作品でした。新作が待たれます。かつて中国、香港からイギリスまたアメリカへ渡り映画監督としての教育を受け、再び活動の場をアジアに戻した女性監督たち、唐書璇（セシル・タン）、許鞍華（アン・ホイ）といった優秀な映画作家がいたことを改めて思い起こすことにも繋がります。